

後輩男優が次の作品に悩んでいるって
うから相談にのったのに、なんか上手く
言いくるめられて深イキ不可避の激甘
セックスにもつれこんでしまったんだけ
ど!?

体験版

元風俗店勤務テクニシャン新人タチ男優×努力派のベテランネコ男優

攻め：セノ

受け：メロウ/メロさん

要素：年下攻め、乳首責め、深イキ、ドライオーガズム、連続絶頂、69、駅
弁、寝バック、結腸責め

休みの日に、仕事以外でほとんど連絡のないスマホから着信音が鳴った。もしや
何か予定を見落としていたのかと慌てて画面を見ると、できれば仕事でも極力会
いたくない人物の名前が表示されている。しかも登録名が「大好きなセノ君」に

なっていたので腹立たしい。一体いつの間に、人のスマホに連絡先を登録したんだ。

色々考えていたせいで、コール音は既に5回目だ。正直、間違い電話であってほしいとか、向こうから諦めて切ってほしいと思ったけれど、もしかしたら緊急の連絡かもしれない。無意味な電話なら出てから断ればいいかと、僕はため息交じりに通話の方へと指を滑らせた。

「...もしもし」

「あ、メロさん...？」

けれど重い声で電話に出てみると、セノ君の様子がいつもと違った。普段の彼の元気さがない。むしろ、ちょっとしょげているというか、なんなら泣いている気配すらある。えっ、なんだなんだ、彼に限って何かあったのかと、僕は寝転がっていたソファから体を起こした。

「え、どっ、どうしたのセノ君。何かあったの？」

「っ、俺、今めっちゃ情けなくて...。でもあんま、仕事のことって相談できなくて」

「仕事...？撮影、あんまりうまくいかなかった？」

「なっ、なんかそういうのじゃないんすけど。でも俺、すごいしんどくて」

ぐし、と鼻をすする音と一緒に聞こえてくるのは、自信に溢れるセノ君からはほど遠い声だった。悩みの具体的な内容は分からないけれど、どうやら仕事関係ではあるようだ。

AV男優で、しかもゲイ専門の僕らの職業柄、相談事ができる相手はかなり絞られる。そんな彼が、マネージャーに言うでもなく演者の僕に電話してきたんだ。きっと何か、撮影に関して思いつめているに違いない。

彼のことを良く思っているわけではないけれど、同じ業種の後輩が困っている。そんな彼が、僕を頼って電話をかけてきたんだ。細かい事情はともかくとして、落ち込むセノ君を放っておけるほど薄情にはなれなかった。だから電話口で泣く彼にかけ言葉は、よくある定番の台詞になってしまう。

「え、ええっと...、その、僕でよければ話を聞こうか...？人がいるところで話したくないなら、僕の家でもいいけど」

「行くっす、すぐ行くっす。なんなら近くにいるんで」

「え？近くに？」

「今、メロさんってメロさんの家にいる？」

「いるけど」

「じゃあすぐ行くっす」

けれど気落ちしていても、セノ君の行動力は相変わらずだった。一方的な電話の後、一方的に通話が切られ、10分もしない間にセノ君は僕の家インターホンを鳴らしていた。あれ？彼って結構近所に住んでいるのかな？と思ったけれど、元々早く相談したくて僕の家そばまで来ていたのかもしれない。ひとまず思い

のほかぼろぼろの顔をした彼が心配だったので、僕の家に着くまでの詳細な経緯は後で聞くことにして、彼を家に招き入れた。

「せっ、セノ君。どうしたの、そんな顔して」

「うう...！メロさん、メロさん...」

「わ、わっ」

そして家に入るなり、セノ君は僕に抱きついて離れなくなってしまった。しょんぼりと暗い空気を纏う彼の様子を見るに、外で冷静に話を聞くんなんてできそうにもない。どのみち悩みの内容によっては、周りに人がいるところでは話しにくい時もある。ここは僕の家で気持ちを落ち着かせてもらって、ゆっくり話を聞くことにしよう。

「う、よしよし...。まあ上がってよ。お茶入れるから、あっちに座って待ってて」

「離れたくないっす」

「そんなこと言われても...」

「大人しくしてるから」

「そういう問題でもないような...？」

ただ、彼は家の中に入っても、僕にピッタリくっついて離れない。なんならお茶を入れてソファに並んで座ってからも、僕に抱きつきっぱなしだ。一体何が彼をここまで弱らせているのかと、困惑しながら彼に話を聞いていく。

「それで、どうしたの？セノ君がこんなに落ち込んでるのなんて初めて見るよ」

「...俺、演技に自信ないのに、苦手な仕事受けちゃって。それで、上手くできなかったらどうしようって」

そして彼の悩みを聞いてみると、存外まっとうな悩みで拍子抜けした。しかも相談相手としても、割と僕は適役だった。実は仕事と関係なしに、僕の家に来る口実を練ってきただけではないかとも勘ぐっていたけれど、きちんと筋が通っていたので安心する。

それにしても、セノ君にも苦手な分野があるとは。そもそも彼自身が風俗店で勤務していた経験もあるので、演技に関しては好評な印象だ。彼が思い悩むほどだから、よっぽど濃いSMものの撮影でも控えているのだろうかと思い、僕は彼を褒めつつ質問を重ねる。

「セノ君は器用だし、どんな役でも上手くこなせそうだけどね？内容自体がハードってこと？」

「いや、むしろ逆っす。恋人同士でイチャイチャっす」

「あ〜、なるほどね。最近はそういうのも需要あるからなあ」

そうして返ってきたセノ君の答えを聞き、僕はすっと腑に落ちるものがあった。いっそありえないキャラクターを命じられると、逆にその役にのめり込むことができるので、むしろ楽だったりする。だから素の自分が出てきてしまうタイプの演技は、どんなものもいいだろうと悩む気持ちは僕も一緒だ。

セノ君は顔立ちが整っているから、ゲイ受けもするだろうし、女性受けもいいんだろう。最近では女性の視聴者層に売っていくことも珍しくないから、セノ君にオファーが行くのは自然な流れだ。けれど彼自身は、嬉しさ半分、後ろ向きな気持ち半分、といったところか。

「恋人の演技って、してると素の部分が出てる気がして恥ずかしいよね。僕も割と苦手だったし、今でも得意ではないかな」

「メロさんの過去作では、めっちゃ上手にできてたっす」

「そう、なのかな...？まあでも僕でもできてるし、セノ君にもできるよ。そんなに変わったことをしようと思わずに、自然体でいいんじゃない？」

「それが逆に難しいっていうか...」

けれど彼を慰めても効果は薄く、ペしよりとうなだれてしまう。そんなに嫌なら断ってもいいのではと思うけれど、まだ新人な彼なりに、受けられる仕事の幅を狭めたくない気持ちもあるのだろう。同じ演者である僕も、彼の悩みは良く分かるところだ。

とはいっても、なんだかんだ器用にこなす彼だから、やってみればどうってことなかった、なんてこともあるだろう。だから僕は彼を勇気づけようと声をかけるものの、セノ君は大分マイナス思考になっているようだった。

「どうしよ。俺、全然うまくできなかつたら干されるかもしれないっす」

「そっ、そんなことないよ、大丈夫だよ」

「今までラッキーだっただけの、微妙な奴だってバレる」

「いやいや、新発売の作品、常にランキング入ってるじゃない。自信もってよ」

「だってしたことないっすもん、恋人の演技」

「みんな最初は初心者だって」

「それならメロさんは、どうやって自信つけたんすか？」

「僕？それでいうと、僕は今でも自信ないけど...。何度もやってみて、経験を積んで...。どうにかこなせるようになった、って感じじゃないかな？」

「じゃあ俺もやって経験積みたいっす。メロさんが俺に教えてくださいよ。恋人同士のコツ」

「ええっ！？僕が！？」

しかしながらプラスの声かけをしているうちに、妙な流れになってきた。経験者に話を聞きたい気持ちは分かるものの、僕らにとって経験といったらセックスそのものの指導になる。いやいや、今ここで教えられるわけがないと、僕は自分の前で素早く両手を振った。

「おおおお、教えるなんて無理だよっ！それに僕、君と違ってネコ側だし！」

「雰囲気だけでもいいから」

「い、や、雰囲気って言われてもっ」

「『お願い、欲しがりな僕に入れて...？担任教師と生徒が、家で教室で、保健室で...ラブラブ10連発！物足りないメロウがおねだり♡禁断の関係 先生と僕』の50分から1時間20分あたりの濃厚にチューしてハメてるところあたりを練習したいっす」

「過去作のタイトルをフルで言うのやめてくれる！？ていうか例が具体的すぎる！実例があるならそっち見た方が早いでしょ！タチ役も映ってるんだから！」

「いやいや、見るだけじゃ分からないこともあるし？実践が一番っすよ、こういうのは」

「や、やっ、ちょっと...！」

でもことセックスとなると、色々上手なのはやっぱりセノ君だ。しれっと両手を掴まれて、徐々にソファに押し倒されていく。抗う間もなく足が体の中心に割り込んできて、ぐに、と膝で股間を押された。やばい、あれ、これって本当にする流れなのかと、僕は近づいてくる顔を見てとにかく焦った。

待て待て、これは僕が体を張って教える流れなのか。なんで練習相手が僕なんだと、心の中では文句が耐えない。でも、さっきのセノ君の落ち込み具合は異常だった。もしここで僕が突っぱねた結果、彼が病んだり引退したらバツが悪い。ならいっそ、穏便に、ほどほどに、それっぽく教えて満足してもらう方がいいのかもしれない。その場合は僕がしっかりコーチングする体で話を進めていくほうが、自分の身のためでもある。過去の経験上、セノ君任せだと悪い方に運びがちだ。だから僕はどうにか体をひねり、肘で接近する彼を食い止めた。

「ちょ...ッ！セノ君！ちょっと待つ！」

「は？何、この腕？普通に待ちたくないっすけど」

けれど僕が拒否した瞬間のセノ君は、一瞬いつもの彼に戻っていたような気がした。それを見て、あれ、やっぱりセノ君って僕とやりたいただけなんじゃないの

疑いの目を向けると、彼はうるりと目に涙をためて、ぱっと両手で顔を覆ってしまう。

「やっぱりダメ...？メロさんが教えてくれないなら、もう俺の芸歴終了っすね...。いいっす、無理なら全然。明日ロープもって樹海行ってきます。ううん、もうすぐ行くっす。最寄りのホームセンターに寄って、それから行ったら何時に着くかな...」

「いっ！？いやいやいや、早まらないで！？もちろん教える！雰囲気でもいいなら僕が教えるよ！？」

「ほんとに...？絶対絶対教えてくれる？」

「そ、そりゃあ困ってる後輩からの頼みだし...？だけど、恋人同士って甘い感じの空気感が大事なのに、こんなところで無理やりするのはどうかと思うよ。やるなら寝室で教えるから、それでいいよね？」

「なあんだ、それならそうと早く言ってくれたらいいのに。俺、メロさんちのベッド大好きっす」

でも僕が過激な発言をするセノ君をなだめると、ぶん、と尻尾を振る音が聞こえ
そんな笑顔で彼が抱きついてきた。そしてとても不本意ながら、僕のベッドにて
セノ君と行為を行うのは今日が初めてじゃない。以前、エネマグラを入れた僕のお尻を人質に取るという、非道な手段で部屋に入られてしまったからだ。その後もドロドロに溶かされた孔に入れられて、相当泣かされた思い出がある。

けれど無理やりな手段でやられた前回とは違い、今日は僕から寝室に招き入れているのが不思議な感じだ。人型の大型犬を引きずるように寝室に向かい、開いて

いた遮光カーテンを閉める。そのまま明かりを調整して、環境を整えた。だけれどセノ君を思ってしまったことなのに、彼は何かが不満らしい。

「...メロさん、なんかやるための手際よくない？慣れてるの嫌なんだけど」

「え？嫌って言われても...」

「別の男の匂いするのがヤダ。メロさんは俺のなのに」

「うん、僕は君のものではないんだけどね？でも仮にそうだったとしても、そのメロさんは、昔誰かのメロさんだったんだよ？」

「そうなんだけどお...。ああもう、やらしい、なんか悔しい」

セノ君はどうやら、僕から過去の恋人との関係がにじむのがお気に召さないらしい。でも普段は僕より経験豊富な彼だから、年相応に僕の方が大人になれた気がして少し楽しくもある。ぷく、と僕の肩に顎を乗せて頬を膨らませるセノ君は、怒涛の攻め方をする彼と比べて毒気が少ない。だから膨らむ頬を撫でて笑いかけると、セノ君は複雑な表情をして顔を擦り寄せてきた。

「なんかショック、メロさんのエッチ！」

「セノ君にだけは言われたくないかも」

「...で、移動したら次はどうしたらいいですか？早く教えてよ」

そして先ほどとは別方向に機嫌が悪くなったセノ君は、ふて腐れたように先を急かしてきた。彼の子どもっぽい仕草がかわいいと思うのは稀だけれど、今日ほどこか弟のようでかわいく感じる。

そんなセノ君の頭を軽く撫でてから、僕は自分の服に手をかけた。

「今回の撮影の始まりがどんな感じが分からないし、とりあえず下着スタートでいいかな」

「俺も脱ぐ？」

「その方が効率がいいと思う」

言っても職業柄、裸に特に抵抗のない僕らは、脱ごうと思えばさっさと裸になれるタイプの人間だ。ましてや、こんな風に環境が整備されていればなおさら。ばっ、ばっ、と手早く二人とも下着姿になって向き合う。でも、僕自身も特に教育係になったことはないので、二人でベッドに腰をかけてから沈黙してしまった。気まずい無言が続く中、僕は一旦頭を整理する。

まずは、徐々に愛情をにじませる演技からだろうか。だとすれば、黙って見つめあってからは、普通にキスをするのが定石だと思う。技術一つ一つはセノ君に教えなくてもいいと思うので、流れや雰囲気伝えていけば問題ないだろう。

よし、と一息ついてから、僕はセノ君の手を握った。そのまま身体を近づけて、お互いの皮膚が密着するまで近づく。

「まあ…。まずは無難にキスからだよね？」

「キスからっすね」

「ん、うん」

そして言葉をかけるや否や、セノ君はすぐに軽い口づけをしてきた。ちゅ、ちゅ、と音を立てて唇を吸い、はむ、と下唇を甘く噛んで、舌を滑り込ませてくる。さりげなく腰や頭を引き寄せる手つきは相変わらずスムーズだ。ただ、あまり彼に任せていると、僕もうっかりその気になりかねない。技術面は問題ないのだから、さっさと次に進まなければと、呼吸の合間に指示を出していく。

「ん、っ、そ、そのまま、優しく押し倒すみたいにして？」

「押し倒してからは？」

「その後は...、上から順番に？」

「上って？」

「え、あ、首とか、肩とか、乳首とか...？」

「そこをどうしたらいいですか？触ったらいい？舐めたらいい？」

「いや、そこは...！ん、っ、お、お任せで、いいよ。セノくん、基本的に上手なんだから」

ただ、割と細かくやることを指定する必要があって困惑した。分かっている体で進む撮影とは違って、教えるとなると勝手が違って緊張する。しかもなんだか、僕から求めているみたいで気恥ずかしい。だから最後の方は答えをはぐらかすと、セノ君は嬉しそうに笑っていた。僕が彼を褒めたので、少し機嫌が直ったらしい。

口からセノ君の唇が離れてからは、顎や首筋、肩にたくさんのキスが落とされた。がぶ、がぶと、全てを食べつくすようないつもの彼とは違って、大事な物を

愛でる繊細さがある。きゅ、と肩を抱きしめられると、つい僕も彼の背に手を回していた。

「ん、そう、上手。大体の流れは、今みたいな感じでいいんじゃないかな？」

「ほんと？いい感じ？じゃあメロさんはどう？こういうのはドキドキする？」

「っ、はうっ...！」

すす、と鼻の先を擦るように首に顔を寄せてから、耳元で甘く囁かれると、背筋がゾクゾクする。教えている立場なんだと分かっていても、生理的な気持ちよさが勝った。ああ、やっぱり上手い。まだキスの段階なのに僕が溶けてしまいそうだと、ぎゅっと目をつむってしまった。それなのにあくまで演技指導だと思う彼は、僕に遠慮することなく次々に行動を起こしていく。

するりと、僕の手にはセノ君の指が絡んだ。淡く握られる手も思いのほか感じてしまって、どうしたらいいのか分からなくなる。

「どう？これも恋人っぽい？」

「そっ、そうだね！いいと思うよ」

「嬉しい。メロさんから褒めてもらえるの。俺、もっともっと上手になりたいっす」

「や、セノ君はもう、本当に十分上手で」

「ううん、まだまだ。だって俺、本気の相手をその気にさせられてないっすもん」

「ふあ、ああ...ッ！」

手を繋いだまま乳首を甘く吸われると、じんと脳まで震えるみたいだった。強引に高められるいつもとは違って、じわじわ気持ちよくなる感覚は新鮮だ。しかも密着する部分も多くて、本当に恋人同士でしているみたいでドキドキする。ぬる、と乳首に舌が触れて、優しく唇で挟まれる。そのままチロチロと突起を弾かれると、ぐうっと腰が浮いた。

「んはぁっ...！ひ、う、せ、セノく、んうう、あ、気持ち、い、それ、それ好き...！」

「んん、かわいい、かわいいね、メロさん。乳首気持ちいいね？」

「ひう、ッ、は、は、あ、ぁぁぁぁ...！！んんんう、うゝ ～～...ッッ！！」

触れる舌が途方もなく気持ちいい。いつもの彼から施される愛撫より、ひどく感じている自覚がある。胸の奥まで引っかきまわされるように、快感が深い部分に刺さっていた。

セノ君は彼の声にも、僕を握る手にも、目には見えない魔力があると思う。放っておくと、どんどん彼の言いなりになってしまうんだ。だからまだ始まったばかりなのに、心が落ちかけている。でも、感じすぎて思わず彼の手を強く握ってから、はっと我に返った。

いけない、危ないところだった。つい感じて流される一歩手前まで行った気がする。今日は教育、セノ君の演技指導だと、息を整えて冷静になった。

「んゝ、あ、あふ...っ！！っわ、あ、セノ君！もう胸は、それくらいでっ」

「ええ？まだ左しか舐めてない。右もしたい」

「なっ、いいよ、どっちもしなくていいからっ！」

「やだ、右も舐める」

「舐めるテクニックは折り紙付きなんだから、わざわざやらなくていいって！乳首舐めるだけじゃ進まないし、今日のうちに色々練習した方がいいでしょ？ね？だから胸はおしまい」

「んん〜…。ちょっと不満はあるっすけど…。メロさんがそう言うなら」

けれど僕が彼の頭を引っぺがすと、セノ君はまたしてもむすりと不機嫌になった。むう、と名残惜しそうに僕の胸に目をやっているのを見ると、ちょっと悪いことをしたなと思う。ただし標的にされた乳首がどうなってしまうか読めないなので、これは彼に我慢してもらう方が得策だ。

それに、乳首が終わってからは下半身の愛撫に入る。どちらかという、更に過酷なのはこれからな気がした。彼の場合、役者としては新人ながら、テクニックだけは業界でもトップクラスだ。油断していると練習でも散タイカされる可能性がある、今から身を引き締めないといけない。

「じゃあ、今度はこっちの練習っすけど…。メロさんはどっちでイキたい？前でも中でも、好きな方選んでいいっすよ。俺、どっちでも気持ちよくしてあげる」

「んんん…！」

彼のレベルになると、下着を脱がせるふりをして、ちゃっかり熱を撫でたりする高等技術を持ち合わせている。やばい、こういう不意打ちが結構効くのにと顔を

歪めると、あえて脱がせるのを止めた手が、ぬるっと下着の奥まで侵入してきた。そのままお尻の孔をなぞられると、自分でも分かるほど後ろを収縮させてしまっ、ぶわっ顔が熱くなる。

「あ、あ...！」

「今、お尻きゅんってしたね」

「い、ゃ、言わないでいいから...！」

「ね、教えて？どっちでイキたい？こっち？それともこっち？」

「んは、あ、は、は、～～...っ！！」

ぬるる、ぬるる、と手の平全体で勃起した熱を撫でられるのも気持ちがいい。そのぬめりをまとった指に、くりくりと欲しがりな孔を刺激されるのも気持ちがいい。切なくて泣きそうになる。じわっと先走りがにじむのが恥ずかしくて、恥じらうくせに足が開いていく。

彼の手に触れられるほど、欲しくてたまらなくなる。どちらでも好きな方でイカせればいいと、即座に言えばいいのに。言わなくてもいい、隠すべき本心が引きずり出される。ダメだ、ダメだ、流されるなと理性的な部分では思うのに、もう一度耳元で教えて？と甘く囁かれたら、ただでさえ脆い防御の一部が崩壊してしまう。

「あ、な、中で...！中で、イキたい...」

「いいよ。じゃあ中でイかせてあげる」

ふ、と漏れるセノ君の息に、期待で肩が弾む。それがひどく恥ずかしくて、彼を見ていられなくなった。だけれど腕で顔を隠しても、彼がベッドに備え付けの引き出しからローションを手にとったのが、気配だけで分かった。空気の動きで感じるほど、セノ君の動きに釘付けな自分が嫌になる。なのに下着を脱がす手をアシストする、足の動きは正直だ。無言の期待が行動に出ている。

視界は腕で覆ったせいで真っ暗でも、その奥でローションを伸ばす音が聞こえた。彼の手でローションが温められたら、もうすぐに。

そう思って構えていた時、パッと腕がセノ君によってはずされた。その瞬間、真っ赤な顔を隠せず慌てた口を、セノ君に捉えられる。そして完全にキスに意識を持っていかれてから、中に指が入ってきた。

「あふ、ッ、ん、んんうううっ！！？」

さっきまではあれほど中に気持ちを向けていたのに、いざ別の場所を刺激されるとそちらにばかり気を取られた。だから不必要なくらい感じてしまって、大げさに身体が跳ねるのが恥ずかしい。けれどそれすら包み込むように頭を撫でられると、とろんと脳まで溶けてしまいそうになる。

「ん、んふ、う、う、あ、あああゝ...！」

「メロさんの中、熱くてトロトロ。俺の指待っててくれたの？」

「っ、っ...！」

演技中の台詞指導も、本当ならした方がいいと頭では分かっていた。なのに自分のことでいっぱい、頷くことしかできない。だって彼ときたら、口を動かしながらも淡々と指で前立腺を擦っている。すり、すり、と決して激しくはない触れ方なせいか、ただただ気持ちよくて焦った。台本を覚えていたならともかく、アドリブで全てを行う必要がある今、台詞を脳内で構築する余裕はない。

「メロさん、どうして静かになっちゃったの？あんまり気持ちよくない？」

「ち、ちが、そんなことは、ないけど...！ごめんね、僕、あんまり余裕ないかも...」

だから先輩として情けないながらも、僕はさっさと自分の状態を打ち明けることにした。でも全体の流れの練習だから、僕にできることはした方がいい。そう思って恋人っぽく彼に抱きついて謝ってみると、ビタッと一瞬セノ君の動きが固まる。

「セノ君...？」

「...それ、ほんとに余裕ない？何割が演技っすか？」

「え！？どうだろう？6割、くらいかな...？」

「ふうん？じゃあほぼ演技じゃん。どの口が余裕ないとか言ってんの？」

だけれど僕が言葉を間違ったのか、セノ君が纏うオーラが一段階重くなった。あれ、僕は何かやらかしたのかなと思ったけれど、しくじり部分が分からなくて困惑する。

でも今日は、セノ君の方が切り替え上手だった。彼がぐっと息を吸い込んだ後、どす黒い空気が瞬時に浄化されていく。ふう、と息を吐いたときには、セノ君はまたさっきのような甘い空気を作り出していた。そのまま僕の片手を取って、ちゅ、と口づけてくる。

「すいません、俺も余裕なかったかも。さっきの台詞、めっちゃ燃えたっす。俺も挽回したいんで、続きでもいい？」

「ッ...！う、うん」

ただ、僕は止まった時間が流れるのを感じてほっとする反面、彼を恐ろしくも思っていた。セノ君と会うたびに思うけれど、どう考えても彼自身の魅力が増している。初めて会ったときから異彩を放っていたけれど、今では内側から溢れる凄みが、より色濃く滲むようになったと思う。タチとして更に磨きがかかっていると云ったらいいいんだろうか。とにかく、僕らネコがときめく行動は倍増どころか3倍にも4倍にも膨れ上がっている。

相手を高める台詞と一緒に、甘えた言葉を言うことも。一応確認はするくせに、既に指が動いていることも。前のセノ君にはなかったことだと思う。正直この成長っぷりを見せられるなら、僕の指導なんかなくてもやっていけるんじゃないかと思ってしまう。それでも練習しておこうと思う貪欲さが彼の成長速度を加速させているのか、別の要因があるのかは分からない。ただ、もしも僕が最近新人デビューした男優の中で、最も注目度の高い人が誰かを聞かれたら、迷わず彼の名前を挙げると思う。それくらい、セノ君の急成長には目を見張るものがある。だから僕も必死だ。油断していると、彼に全てを奪われてしまうから。

「指で弄られんの好き？いいとこ擦られるのと、押されるのどちらがいいの？」

「ん、あ、あ、ああ...！ど、っちも、どっちも好き...！」

「へえ？どっちも好きなんだ。えっちでかわいいね」

「ふあ、あああああううう...！」

ぐうう、と指で前立腺を押されると、ゾクゾクゾクっと腰の骨が痺れる。でも激しくはなくて、一度強めに押されたら、褒めるように優しく擦られる。上手く混ぜられる指の動きが気持ちよくて、つつい声が漏れていた。

いつもなら、彼はもっと暴力的なくらいの快感を与えてくることが多い。僕が慣れるより先にガンガン高められたり、時には絶頂手前で焦らすような意地悪をされる。けれど、今日はただただ素直に気持ちよくなるばかりだった。だから心の防御も緩くなって、普段は口にしない言葉がうっかりこぼれてしまう。

「ひ、あ、ああ、んん...！ね、ねえ、もっと奥...、ッッ！！！！？」

ぼろっと、本当に無意識にこぼした台詞に、僕は瞬時に慌てた。今、僕は何を言った？もっと奥？いやいや、もっと奥じゃないだろう、普通におねだりしてどうする。これは演技指導の一環なのに、ただヤッてるみたいなことを言ってしまった。プロ失格の言動に、一気に恥ずかしくなる。けれど、これが僕の本心かどうかなんてセノ君には分からない。だから早めに補足を入れようと、顔の前で両手を振った。

「ああああっ、違う、違うからね！これは演技の一環で、べ、別に奥に入れなくてもいいからっ！」

でも僕が苦しい言い訳をしていると、ふわりとメロ君が微笑んできた。その顔に目が奪われていると、ポンポン、と優しく頭が撫でられる。それに僕が、は、と息を吐くと、セノ君は目を細めてつぶやいた。

「かわいーね」

その余裕しかない声が、あまりにも愛情に溢れていたものだから、僕は更に顔が熱くなった。はく、はく、と開閉する口から、自分を守る言葉も、彼への言葉も出てこなくなる。

なんだこれは、なんなんだこれは。おかしい、あの悪魔とも思えたセノ君が、カッコよく見えている。妙な魔法にかかった気分だ。いや、そもそもセノ君は顔も身体もカッコいい方で、えっちも上手で、性格以外は大体フルスペックの色男で……。

あれ、僕は今、一体何を考えていた？

「指増やしていい？」

「へ、あ！？ま、まだ待っ、んんうううっ！！？」

しかも考えがまとまらずに思考をめぐらせているうちに、中に入る指が2本に増えた。やばい、セノ君のペースに変わるといい事は起こらないのにと、一瞬身構

えてしまう。それなのに彼の指は、ひとつも僕を乱暴に扱わずに、キス一つとっても甘くてとろけるものになっている。

君、そんなテクもあるの。どこまで上手くなったら打ち止めなのと、いつの間にか僕から彼の背に腕を回していた。大きく開いた足は、既に抵抗する気をなくしている。じわり、じわりとこみ上げる切ない快感に身を任せて、ただただ気持ちよくなっていた。

「んは、あ、あう、んん、んっ！」

「ほら、もっと奥まで入るよ？」

「はふ...っ！ん、ッ、ひ、あ、ああ、んん、い、っしょに、して、いいとも、一緒にい...！」

「いいよ。メロさんの好きなこと、全部してあげる」

「ふああああ...ッ！あふ、っ、そ、それ好きっ、気持ち、いゝ、あ、あああっ！」

更に増えた指が、奥も前立腺も、何もかもをかき混ぜている。身体も心もぐちゃぐちゃになって、演技と本心の境目が曖昧だ。甘い指先と優しい声に、心の奥まで引っかきまわされている。

ここだよね？好き？このままがいい？いいよ、なんでもしてあげる。かわいい。もっと声出して？と、無数の囁きが落ちてきては、僕の身体に染みこんでいく。セノ君の色に変わっていく自分が怖いのに、もう好きにしようと思ってしまうくらいには、彼の指使いは上手だった。

本当にこのままイキそうだと、覚悟を決めるまでにそう長い時間はかからなかった。元々我慢はさせてもらえないだろうと踏んではいたから、これは当然の流れでもあるけれど。

ただ、イク時の演技はお互いにとって大事だ。だから僕は教育者として、ギリギリ役目を果たさなければと、役者の気持ちに切り替える。

「ね、え、イキ、そお...！ イッてもいい？ い、あ、イク、イク、う、あ、あゝ、あ——.....！！」

中でイク時は、射精と違ってイッているかどうかははっきり分かりづらい。だから、撮影の時は少しオーバーなくらい分かりやすくするのが基本だ。そして恋人もののシチュエーションなら、ぎゅっと抱きついてかわいらしく。僕というネコ男優に求められる、最大の特徴を活かすように演技する。

「ん...！ ふ、あ、あ...。 イッ...、 ちゃっ、 たあ...」

一度波が収まったら、少しだけ身体を離して笑いかける。ほわりと、快感で浮かされたように表情を作るのも大事だ。そして伏し目になり、次を求めるように、うっとりとしたチ側の熱を撫でるのも忘れない。ただし僕がきっちり役割を果たしたところで、今日はセノ君の演技指導だから、ネコ役の演技を見せる意味はほぼ無いのだけれど。でもこのくらいは相手のネコ男優もするだろうから、流れでの練習にはちょうどいいくらいではないだろうか。

さて、では次はどうするかと、僕は彼を伺うように顔を上げた。するとセノ君は、にっこりと貼り付けた笑みで僕を見ていたので、頭の後ろがぞわっと冷たくなる。

「え...？セノ君、なんか怒ってる？」

「ん？全然怒ってないっす。ちんこはイラついたっすけど」

「それは怒ってるに入らないの？」

「下半身は別の生き物なんで。あ、ところで一回イッたところ申し訳ないんですけど、もう一回イッてもらっていいっすか？」

「ひあうっ！！？」

しかも彼は、なぜか一区切りになったはずなのに、またしても指を動かしてきた。イッたばかりの中を責められるのは、感じやすくなっていて辛いのに。あとは、なぜ急にまたイカせる流れになったのかも分からない。普通はもうここらで入れるんじゃないのかと、彼の手首を握って首を振る。

「んあ、あ、な、なんでえっ！は、う、んんっ！？や、今日はもう入れて、終わりにっ...！」

「ごめんねメロさん。今回はそういう台本なんすよね」

「えっ、そう、なの...？」

「そう。だから練習させて？俺、メロさん以外に頼める人いないもん。ね？お願いお願い」

「ん、ッ、わ、分かった、けどっ！ひ、あ、て、手加減し、っ、く、う、うゝうんっ！」

でも、これが台本なのだと言われてしまうと、仕方がないと思うしかない。断る権利も僕にはあるけれど、入ったばかりの彼が頼める仕事仲間は他にいないだろうし、僕が折れるべきだ。

ただ、仕方がないと思っても、連続でイカされるとさすがに演技もキツくなってくる。イケばイクほど重く長い絶頂になるのが中イキの厄介なところで、インターバルを必要とする射精の方が、身体的に無理がきかない分救いがある気がする。

一度イッてすっかりメロメロになった僕の前立腺をいじめるのくらい、セノ君にとってはわけもないことだ。だからいいように押されて、擦られて、挟まれて、時に引っかけられれば、あっけなく2度目の絶頂に連れていかれる。

「ふは、あ、あゝッ！！あああ、イッ、く、んん、イク、イッ、あ、ッ、～～～
～ッッ！！」

ぎゅうう、と彼に抱きついて、僕はさっきよりも重い絶頂を迎えた。びく、びく、と身体が跳ねる数も多いし、呼吸も苦しい。やっぱり連続でイクのはしんどいなと、身体をベッドに預けながら思う。

「ん、ふ、ふ...っ！ふ、う...！」

「落ち着いた？じゃあもう一回っすね」

「えっ！！？や、もういい、これ以上は別にっ」

「だあめ。まだ気持ちいいの終わらないよ？」

「ん、ひっ！？やゝっ、ま、あ、ああああっ！？やう、うゝ、なんで、もういない！イクのやだっ！」

「ヤダって言われても…。だってそういう台本だし？」

「や、あ、んっ、ンンんっ！！ひ、ッ、あ、だめ、やだ、やだああっ！」

けれど、僕はこれで終わりだと力を抜いたのに、セノ君の指は抜けていかなかった。無慈悲に動く3本の指は、絶頂直後の前立腺を擦っている。びきっと全身が突っ張るほどの強烈な快感が背骨を走って行って、一瞬息が止まった。

2回連続でイッたら十分だと思っていた僕としては、続きがあることに驚きを隠せない。どうして、なんでこんなにと、彼の肩を掴んで首を振る。膝を曲げて、少しでもセノ君との距離を取ろうともがいた。でもその程度で止まるわけがない。セノ君は、むしろ楽しそうに身体を膝の内側に入れて、抗う僕の姿を楽しんでいる。

「はふっ、う、うあゝ あああっ！！だ、め、も、もお、抜い…ッッ！！」

「抜いたら台本通りじゃなくなるからダメ」

「ッ、あ、あ、や、イクの、辛い、そんなにイケないっ！」

「できるできる。メロさん、連続でイッちゃう演技も上手っすもん」

「いぎ、ッ、〜〜っっ！！まっ、止めて、それだめ、え、っ、ンンんんっっ！！！」

ガクン、ガクン、と大きく身体が2回揺れて、ぐわんと視界が歪む。3回目の中イキは、思った通り今日一番重いものになった。呼吸が浅くなって、なかなか熱が引かない。彼を止めたいのに、指先に力が入らない。ぼろ、とこぼれていく涙も止められずに、呆然と天井を見つめる。

「ううゝ、は、あ、あう...！」

「エロいね。やっぱメロさん、余裕ない方がいい顔する。俺の指が気持ちよくて泣いちゃうとこ大好き」

「ひいっ！！？」

けれどまだ余韻が残っているのに、再び指が中をかき混ぜてきたので、さすがに僕も焦った。いくら連続でイク演技の指導を求められたとしても、本番じゃないのだから3回もイケば練習量としては足りているだろう。

これ以上は僕が指導できなくなるし、身の危険も感じる。だから本当はやってはいけないだろうけれど、必死で暴れてセノ君から逃げだした。

「も、もう無理っ！台本通りできないっ！イキたくない、やだ、やだっ！」

「あ、職務放棄っすかメロさん。ダメっすよお、ちゃんと俺に教えてくれる約束なのに」

「じゃあ早く入れてよっ！終わりでいいでしょ、入れたら終わりにっ」

「だから、そういう台本なんだって」

「う、うううう...！」

ただし力で勝るセノ君に、僕が1対1で戦って勝てる見込みはない。だからすぐに羽交い絞めにされて、より強固に拘束するため、彼に抱きかかえられてしまった。背後に座るセノ君にすっぽり収まるように抱きしめられた僕は、両手を胸の前で掴まれて、腕の自由を奪われる。せめて足だけでも閉じたかったけれど、既に片手がお尻の入り口に当たっている。最悪だ、もうダメだと目をつむれば、守りの薄い場所に指が入り込んできた。

「ああ、あっ、ひいいうゝうっ...！！やゝッ、も、もおお...ッ！教え、られ、な、あ、あああっ！」

「まだまだでしょ？俺、今日でいっぱい練習したいんすよね。約束したんだから、メロさんも最後まで付き合ってよ」

「ッ！！ッッふ、あ、あうううっ！！」

ただ、今日は一応恋人同士のやり取りの練習だからか、いつもより指の動きは激しくない。あくまでイカせてはくるけれど、手つきは優しいものだった。でも、連続でイっている最中の内部はずっと震えていて、些細な動きでも過敏に感じ取ってしまう。前立腺を擦られ続けたら、どんどん頭が真っ白に変わって行って、今の状況すら掴めなくなっていく。

「んふあ、あゝ、あう、ッ、イク、イッ、あ、ああああ...！！」

「見てほら、先走りもすごい。えっちなお汁で俺の手べちゃべちゃ」

「あふ...っ！！うゝ、あ、あ、あッ！ひ、だ、め、も、ゆるひ、ッ、ッッ！！」

「びくっ、びくってして、すごいかわいい。かわいいから何回でもイカせたいくなる」

「や、も、いい...！こんな、お、おかし、く...っ！」

「感じて？演技抜きで泣いてよ。んあぁってほら、いつもみたいに余裕ゼロのえっろい声出して？」

「っ、は、はふ.....ツツツ！！！」

はむ、と耳が甘噛みされたとき、ぞわっと腰がうずいた。そのうずきが収まらないうちに、ぬるりと耳の中に舌が入ってくる。じゅる、ぬる、と舌が動く音や吸われる音が頭の中で響いて、精神的な退路も塞がれていく。

ああ、逃げられない。どうあがいても逃げられない。追い詰められている。セノ君から受け取るなにもかもが気持ちいい。ダメだ、ダメになる、もうどうしようもないと目をつむったとき、彼は最高のタイミングで僕の引き金を引く。

「ああやばいやばい、やばいっすねメロさん。だんだん全身ガクガクしてきたよ？キツイね、イキ過ぎて苦しいね？」

「う、ひ、ひう、ッ、だ、め、だめ、も、お、おあ...っ！」

「でもいつもと違って、狂っちゃうほどじゃないでしょ？いいじゃん、気持ちよくなっちゃえば。大好きな中イキで、頭真っ白になるまでイキまろうよ。ね？ほら、とんとん、とんとんってされんの気持ちいいね？」

「はうっ、う、あ、あ、っ、あゝ、イク、イツ、あ、あ、あ...！！」

「そうそう、上手。そのまま俺に全部任せて、メロさんはイクイクしてようね。んん、いい、子、お耳もお尻も全部気持ちいい気持ちいい...」

「っ！！ッッッ！！！！っく、は、んんっ！んんううううう.....っっ！！！！？」

セノ君に身を任せて、いい結果に至ったことなんかないのに。もう何も考えられない僕は、ただ耳から聞こえる声の言いなりだ。分からない、気持ちいい、イキ過ぎてるのにまだ欲しくなる。溶ける、このまま落ちると悟ったときには、重くて深い絶頂に沈んでいた。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー